

# 第一回大学入学共通テスト分析

## 1. 第一回試験の概要

二〇二一年一月に第一回大学入学共通テスト（以下、「共通テスト」）が実施された。今年度は例外的に第一日程、第二日程の二回の試験と、特例追試験が設けられた。

事前に公表されていた共通テストの問題作成方針は次の通りである（二〇二〇年六月）。

- ・言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。
- ・近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。
- ・問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせ、複数の題材による問題を含めて検討する。
- ・マーク式問題の新たな出題形式として、いわゆる連動型の問題（連続する複数の問いにおいて、前問の答えとその後の問いの答えを組

み合せて解答させ、正答となる組合せが複数ある形式）を問題作成のねらい、範囲・内容等を踏まえて、出題する場合がある。

- ・大問別得点の詳細は、近代以降の文章（2問100点、古典【古文】1問50点、漢文【1問50点】）。

（なお、令和三年度試験では記述問題は出題しないとされていた。）

従来のセンター試験と大きく異なる点として、「実用的な文章」や複数の題材による問題が出題される可能性が示されたことが挙げられる。

実際に行われた試験では、全体としてはセンター試験を踏襲しながらも、複数の問題文や、資料を含む設問・言語活動の場面を想定した設問などが出題された。

第一日程と第二日程の出題内容を比較すると、前者の方が比較的顕著に新傾向が見受けられた。主に新傾向と思われた点は、下表の通りである。次ページ以降では各大問について新傾向部分を中心に分析する。

## 2. 第1問（論理的文章）

	第一日程	第二日程	昨年度
本文字数	約3400字	約3700字	約3200字
設問数	5	6	6
マーク数	12	11	11

〔本文字数〕は設問中の資料等を含まない（以下同様）

第一日程は香川雅信『江戸の妖怪革命』からの出題。全体の設問構成はセンター試験に近い形であった。問5に、学習の過程（「ノート1〜3」）を踏まえて本文の理解を深める、新傾向の問題が出題された。特に問5(ii)では、芥川龍之介の小説「菌車」の一節が引用され、複数の文章を踏まえたうえで内容を理解することが求められた。問題作成方針における「基本的な考え方」で示された、「学習の過程を意識した

問題の場面設定」が踏まえられていると思われる。【ノート3】はやや分量が多く、選択肢も三行のため解答に時間がかかるが、紛らわしい選択肢はない。目新しい形式ではあるが、これまでと同様、文章の内容を正確に読解できるかがポイントとなった。

(i)は、段落構成に関する問題。選択肢は四つ。【ノート1】で段落分けが既にされているため、該当の段落を読み取る。各段落の概要を正確に押さえられているかがポイント。(ii)は、やや広い範囲の内容理解が必要となり、「近世」「近代」それぞれにおいて、どのように妖怪がとらえられていたかを読み取ることが求められた。その他、問1の漢字問題で選択肢が従来の五択から四択となった点や、問6で出題されることが多い表現に関する設問が出題されなかった

### 「ノート3」

本文の[17]には、近代において「私が私にとって不気味なものとなった」ということが書かれていた。このことに関係して、本書第四章には、欧米でも日本でも近代になってトッベルゲンガーや自己分裂を主題とした小説が数多く発表されたことあり、芥川龍之介の小説「菌車」(一九二七年発表の次の一節が例として引用されている)。

第二の僕、——「独逸人の所謂 Doppelgänger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。しかし聖米利加の映画俳優になったK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけていた。(僕は突然K君の夫人に「死運はつい御挨拶もしませんでしたと言われ、当惑したことを覚えていて、それからもう故人になった一隻脚の翻訳家もやはり銀座のある煙草屋に第二の僕を見かけていた。死はあるいは僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった。

考察 トッベルゲンガー(Doppelgänger)とは、ドイツ語で「二重に行く者」、すなわち分身の意味であり、もっ一人の自分を「見て、まっ」怪異のことである。また、「トッベルゲンガーを見た者は死ぬと言いつた」と説明されていた。

[17]に書かれていた「私」という近代に特有の思想とは、こうした自己意識を踏まえた指摘だったことがわかった。

### 【第一日程・第1問 問5】芥川龍之介「菌車」

引用部分の内容を正しく読み取り、本文における筆者の主張と関連づける作業が必要とされた。

### 第一日程

設問中に三つの【ノート】(問題文のまとめと考察)が示された。

### 第二日程

選択肢が生徒の発言形式になっている設問が出題された。

第4問 漢文	第3問 古文	第2問 近代以降の文章 (文学的文章)	第1問 近代以降の文章 (論理的文章)
問題文として二つの漢文が示された。	設問中に【文章】(和歌とその解説)が示された。	設問中に【資料】(問題文に対する批評文)が示された。	設問中に三つの【ノート】(問題文のまとめと考察)が示された。
設問中に【資料】が示された。	本文中の「月」の描写を多角的に問う設問が出題された。	生徒の話し合いの場面を踏まえた設問が出題された。	生徒の話し合いの場面を踏まえた設問が出題された。

点が、従来のセンター試験と異なった。

第二日程は多木浩二『もの』の詩学からの出題。第一日程よりもさらにセンター試験に近い形式であった。問6に近年のセンター試験でも出題されていた会話形式の設問が出題された。第一回試行調査の問5に似た形式であり、本文の趣旨を正確に読み取ったうえで、それに新たな観点を加えて考察することが求められた。

## 3. 第2問（文学的文章）

	第一日程	第二日程	昨年度
本文字数	約3600字	約3600字	約4700字
設問数	6	6	6
マーク数	9	9	9

第一日程は加能作次郎「羽織と時計」からの出題。二〇一九年・二〇二〇年センター試験では昭和期の小説が続けて出題されたが、今年は大正期の作品が取り上げられた。

問6で【資料】(問題文に対する批評文で、作品の欠点を指摘したもの)をもとに作品の解釈を問う新傾向の問題が出題された。問題作成方針の「異なる種類や分野の文章などを組み合わせ、複数の題材による問題」を意識した設問であった。

【資料】  
 今までの氏は生活の種々相を様々な方面から多角的に描<sup>(注1)</sup>して、其処から或るものを淨き上らせようとした点があったし、又そうすることに依って作品の効果を強大にするという長所を示していたように思う。見た儘、有りの儘を刻明に描写する——其処に氏の有する大きな強味がある。由來氏はライフの一点だけを翫<sup>(注2)</sup>って作をするというような所謂「小説作家の面影は有<sup>(注3)</sup>っていないかった。

それが『羽織と時計』になると、作者が本当の泣き笑いの悲痛な人生を描こうとしたものか、それとも単に羽織と時計に伴う思い出を中心にして、ある一つの興味ある視<sup>(注4)</sup>を、否<sup>(注5)</sup>つのおちを物語<sup>(注6)</sup>ってでもやろうとしたのか分らない程諷刺<sup>(注7)</sup>な所の小話臭味の多過ぎた嫌いがある。若し此作品から小話臭味を取去<sup>(注8)</sup>つたら、即ち羽織と時計とに作者が関心過ぎなかつたら、そして飽くまでも『私』の見たW君の生活、W君の病氣、それに伴う陰鬱な、悲惨な境遇を如実に描いたなら、一層感銘の深い作品になったろうと思われる。羽織と時計とは執<sup>(注9)</sup>し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはな<sup>(注10)</sup>ったが、作品の効果を増す力にはな<sup>(注11)</sup>って居ない。私は寧ろ忠実なる生活の再現者としての加能氏に多くの尊敬を払<sup>(注12)</sup>っている。

宮島新三郎『師走文壇の一瞥』(『時事新報』一九一八年二月七日)

【第一日程・第2問  
問6】宮島新三郎  
「師走文壇の一瞥」  
設問意図がやや分かりにくく、とまどった生徒もいたかもしれないが、紛らわしい選択肢はなかつた。

問5では、本文中の和歌Yと同じ場面で詠まれた『千載和歌集』の和歌Zと短い解説が【文章】として提示された。本文中の和歌XYとあわせて三首の解釈が問われ、問題作成方針の「異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題」を意識した設問であった。六つの選択肢から二つの解答を選ぶ問題。一首の意味だけでなく、和歌相互の関係の理解までが求められた。参照する内容は多いが、和歌と本文をきちんと解釈できれば解答できる。このほか、問3と問4も試行調査と似た形式であった。文法単独の問題がなくなり、問3で解釈や表現効果とあわせて問われた。また、選択肢が同じ箇所に対する内容ではなく、ある文のそれぞれ別の箇所に対する説明になっていることも試行調査と同様であった。傍線部をただ解釈するだけでなく、文脈を踏まえて一つ一つ選択肢を丁寧に吟味することが求められた。問4も試行調査同様、選択肢それぞれが異なる登場人物に対する説明になっていた。

#### 4. 第3問(古文)

	第一日程	第二日程	昨年度
本文字数	約900字	約1200字	約1300字
設問数	5	5	6
マーク数	8	8	8

第一日程は『采花物語』からの出題。全体の設問構成は第二回試行調査と近い形であった。

【文章】  
 「采花物語の和歌Xと同じ歌は、『千載和歌集』にも記されている。妻を失って悲しむ長家のもとへ届けられたという状況も同一である。しかし、『千載和歌集』では、それに対する長家の返歌は、  
 Z 誰もみなとまるべきにはあらねども後るほどはなほぞ悲しき  
 となっており、同じ和歌Xに対する返歌の表現や内容が、『千載和歌集』の和歌Zとは異なる。  
 『采花物語』では、和歌X・Yのやりとりを経て、長家が内省を深めてゆく様子が描かれている。

【第一日程・第3問  
問5】『千載和歌集』  
の和歌と解説文  
本文とあわせて三首の解釈が問われた。

【資料】との対応も確認する必要があった。  
 第二日程は津村記久子「サキの忘れ物」からの出題。現代小説のため、第一日程より本文自体は読みやすかつただろうと思われる。全体の設問構成はセンター試験に近い形であった。  
 問6に会話文の空欄を補充する新傾向的な問題が出題されたが、心情や人物像を丁寧に読み取れば特に難易度の高い問題ではなかつた。

第二日程は擬古物語『山路の露』からの出題。出題内容は従来のセンター試験から大きく変わらなかつたが、問題文上部に行数が明示され、問5において、本文の随所にあらわれる「月」の描写について問われた。資料の提示など目立つた新しさはないものの、問題作成方針にある「文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈」することを要求する設問であつたと思われる。

#### 5. 第4問(漢文)

	第一日程	第二日程	昨年度
本文字数	176字	166字	100字
設問数	6	7	6
マーク数	9	9	7

第一日程は二つの問題文が出題された。【問題文Ⅰ】が『歐陽文忠公集』所収の欧陽脩の五言古詩から、【問題文Ⅱ】が『韓非子』からの出題。問題作成方針にある「複数の題材による問題」であつた。二度の試行調査でも【問題文Ⅱ】が二つ出題されたが、どちらも一つは現代日本語の文章が含まれていた。対して共通テストでは二種類の漢文が出題された。

問題文はどちらも「御術」に関する内容で、問3と問6が二つの問題文を参照して解答する問であつた。問3は【問題文Ⅰ】の詩の空欄に入る語を【問題文Ⅱ】から選ぶ問題。押韻の知

識だけでは解答を絞ることができず、【問題文Ⅱ】の理解も求められた。問6は全体の内容理解の問題。内容はそれほど難しくなかつたが、【問題文Ⅰ】【問題文Ⅱ】を踏まえて解答することが求められた。

第二日程は書家・王羲之の故事を記した、曾鞏「墨池記」からの出題。全体の設問構成はセンター試験から大きく変わらなかつたが、問7に【資料】として『晋書』「王羲之伝」が挙げられていた。こちらも「複数の題材による問題」という問題作成方針に沿った設問であつた。本文と【資料】の内容に「合致しないもの」を選ぶ問題。本文・【資料】から選択肢の根拠となる箇所を探し、吟味する必要があつた。  
 なお、漢文では両日程とも、マーク数が九つと昨年度より二つ多くなつた。

#### 6. まとめ

全体としてセンター試験を踏襲しながら、各

大問に共通テストの問題作成方針に則つた新傾向を織り交ぜての出題であつた。  
 複数の問題文や、【資料】【文章】などが示される問題では、「複数の題材から、大意や問われていることをいかに速く的確に把握することができるか」が大きなポイントになると思われる。「速読力」「大意把握力」をこれまで以上に身につけることが必要といえる。また、想定される設問形式にも触れておくことが望ましいだろう。

一方で、試験で問われている内容や難易度はこれまでと大きく異なるものではなく、従来通り本文の文脈を踏まえて丁寧に読解することが求められた。確実に得点するためには、基本的な「読解力」「語彙力」「文法力」をきちんと身につけることも肝要である。

(数研出版編集部)